

岩手県指定史跡

川原毛瓦窯跡出土資料集

平成 25 年 3 月

紫波町教育委員会

岩手県指定史跡

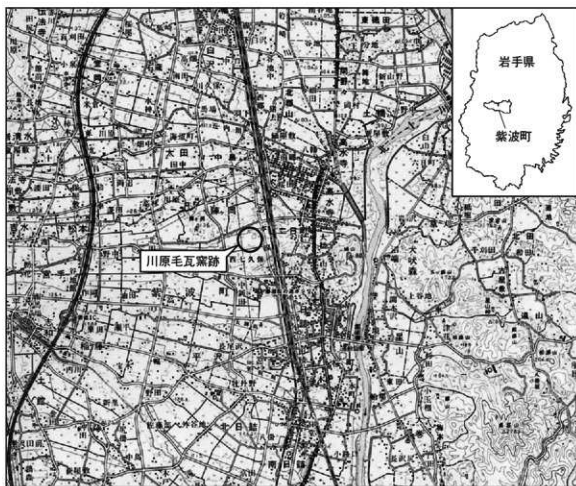
川原毛瓦窯跡出土資料集

平成 25 年 3 月

紫波町教育委員会

例 言

- 1 本書は、紫波町教育委員会が平成元年（1989）内容確認のため発掘調査を行った、岩手県紫波郡紫波町に所在する川原毛瓦窯跡の出土遺構及び出土遺物の資料集である。
- 2 川原毛瓦窯跡は、内容確認の後県営圃場整備事業の除外地となり現状保存となったが、調査報告書が未刊行となっていた。本書は、当時の資料を収集、再整理し概要を資料集としてまとめたものである。なお、川原毛瓦窯跡は平成2年（1990）、岩手県の指定史跡となっている。
- 3 再整理は、花籠博文、鈴木賢治、大畠佳菜子、藤原まゆみ、小澤功子、本書の編集、執筆は花籠博文が行った。なお、出土遺物については羽柴直人氏、村田 淳氏、室野秀文氏から御指導を頂いた。
- 4 本資料集に関する記録類は、全て紫波町教育委員会事務局において保管している。
- 5 川原毛瓦窯跡の所在地及び位置図
岩手県紫波郡紫波町二日町字川原毛75



目 次

例言・目次

I	遺跡の立地と環境	
1	遺跡の立地	1
2	遺跡の環境	1
3	川原毛瓦窯跡発見の経緯	1
II	調査及び検出遺構に関する資料	
1	調査要項	1
2	検出遺構	1
3	基礎地業の状況	2
4	窯跡の規模と構造	2
5	窯跡の埋土状況	2
6	その他の施設	2
	第1図 調査区全体図	3
	第2図 窯跡平面図、断面図	4
III	出土遺物に関する資料	
1	遺物の出土状況	5
2	出土遺物	5
3	出土遺物の一覧表	6
IV	資料のまとめ	
1	川原毛瓦窯跡の歴史的背景	8
2	瓦等の生産供給と窯業年代	8
3	おわりに	8
	窯跡関連文献資料	9
	胎土分析結果	10
V	出土遺物実測図版	
	第3図～第5図 瓦実測図版	12～14
	第6図～第8図 陶器実測図版	15～17
	第9図 窯道具実測図版	18
VI	写真図版（窯跡調査風景）	21
	第1図版～第4図版（瓦）	22～25
	第5図版～第6図版（陶器）	26～27
	第7図版（窯道具）	28

I 遺跡の立地と環境

1 遺跡の立地

川原毛瓦窯跡は、岩手県紫波郡紫波町のほぼ中央部、JR 東北線古館駅の南西 1.5km に位置している。また、遺跡の東方 2km 先には北上川が南流し、盛岡城との距離は北へ 14km である。

2 遺跡の環境

川原毛瓦窯跡は、中位二枚橋段丘面相当の砂礫段丘で形成される日詰台地に載り、周辺微高地には古代から中・近世の遺跡が数多く点在している。東方 700 m 付近には平安時代の須恵器の窯跡群、杉の上古窯跡がある。

圃場整備事業前この付近には粘土を採掘した跡とみられる溜め池が多くあったといわれるが、現在は圃場整備事業により周辺のほとんどは水田となっており、北側には旧来からの果樹園が点在している。

3 川原毛瓦窯跡発見の経緯

川原毛瓦窯跡は、昭和 50 年、周辺の開田の際大量の瓦が発見され、その中にごく少数ではあったが双鶴文軒丸瓦や葛唐草文軒平瓦の破片が入っており盛岡城との関連が疑われていた。

その後、平成元年、当初県営圃場整備事業の区域に入っていたが、関係機関との協議により事業区域から除外し、当時教育委員会が内容確認の調査を行うことになった。

II 調査及び検出遺構に関する資料

1 調査要項

調査は、下記の体制で行った。なお、当時板橋 源先生や東北歴史資料館研究部長だった藤沼邦彦氏など多くの関係機関、各位から御指導、御協力を賜わっているが本書には割愛をさせていただく。

(平成元年の調査体制、期間及び面積等)

調査主体者 紫波町教育委員会 教育長 工藤陽國

調査総括 * 社会教育課長 長谷川久男

調査担当者 * 主任主事 花籠博文

* 主任主事 小岩弘明

* 文化財調査員 桜井芳彦

室内整理 * 小岩弘明、桜井芳彦

調査期間、面積 平成元年 10 月 16 日～同年 11 月 15 日、面積 286.0 m²

調査基準杭 X = - 48.21200 m Y = + 27.824.00 m (平面直角座標第 X 系) H = 124.706 m

2 検出遺構

遺構は、窯の構築に伴うと思われる基礎地業の跡一面とその上に築かれた窯跡一基である。

3 基礎地業の状況

基礎地業は、旧表土上に南北17m、東西15m、高さ1.0mの矩形台地が造成されており、この造成には、粘性土を版築状に盛り、北、東及び西の三方向を白色粘土帯で土留めしている。また、斜面状の南側には全面に粘性土が貼り付けられ、矩形台地の周囲三方には平場が形成されており瓦が大量に散在していた。

4 窯跡の規模と構造

窯は、ほぼ南北方向軸に沿って築かれており、南下端に焚口を持っている。天井部は完全に崩落し北側頂上部は削平されていたため、北端に煙出しがあったと思われるが、全長や高さは不明である。残存している窯体は、全長7.0m、最大幅2.8mを測り、有階有段の登り窯で焚口、燃焼室及び焼成室の第1房を確認した。焼成室の傾斜角は15度で登っている。

焚口は、幅約0.6mで若干狭く入口部分で煙突状に側壁が立ち上がり燃焼室へと続いている。

燃焼室は、幅1.8m、奥行2.2mほどで窯壁は硬く焼きまわっている。底面は比較的軟らかく、薄い赤灰色土が堆積していた。燃焼室の南端から12cmの位置にスサと思われる分焰柱が立ち、これに仕切られて一段登っている。スサは、傾斜しながら登っている燃焼室に付けられたいわゆる斜めスサと思われ、四角い柱状を呈している。検出した最初の焼成室（第1房）は、幅2.05m、奥行0.9mと比較的狭く、上部及び側壁のほとんどは削平されていたため、各焼成室の製品投入口等の状況は不明である。

5 窯跡の埋土状況

窯は、廃棄された後自然に崩落したものとされ、23層土に分かれる堆積状況であった。上部の1層土から9層土は、褐色シルト質土を主体とし灰褐色土、焼土粒、炭化粒などが混入し硬い。

10層土から13層土に下がると、窯体片と思われる赤褐色及びにぶい黄褐色の焼土ブロック層となり硬くしまり瓦片、陶器片などの遺物が多く含む。

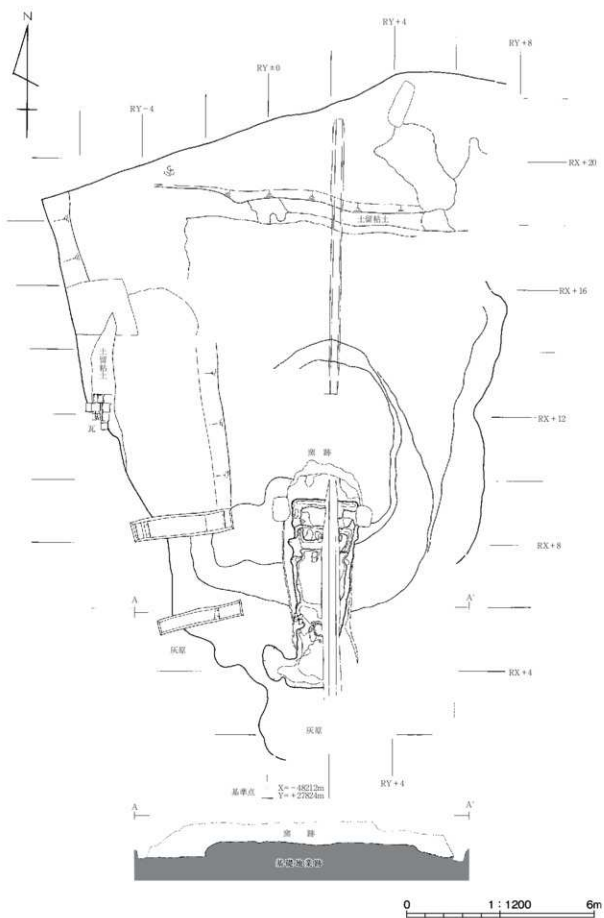
14層土から17層土は、黒褐色土を主体とし灰褐色の炭化粒を含むが遺物の混入が少なくなる。18層土から21層土は、灰白色粘土質土で硬くしまり、窯体片ブロック状にはいる。23層土は、灰原の一部と思われ陶器片などの遺物が多量に混入する。

断面観察表（1層土～17層土断面図省略）

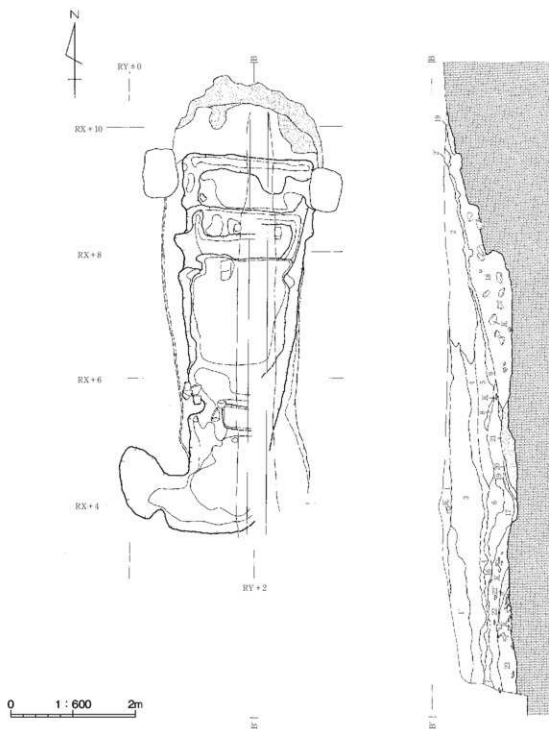
1層土：廃土。白色粘土質土に焼土粒、炭化粒、スコリア様土粒等混入。硬い。2層土：褐色シルト質土。白色粘土質土。スコリア様土粒が若干混入。やや硬い。3層土：褐色シルト質土。4層土：褐色シルト質土。白色粘土質土。スコリア様土粒が若干混入。やや軟。5層土：褐色シルト質土。白色粘土質土。スコリア様土粒が小粒混入。やや軟。6層土：褐色シルト質土。白色粘土質土がスジ状に多く入る。7層土：褐色シルト質土。白色粘土質土がスジ状及びブロック状に入る。8層土：暗褐色シルト質土。白色粘土質土が少なく、径が大きいスコリア様土粒増える。9層土：8層土と17層土が混入。礫、焼土ブロック混入。10層土：ブロック状白色粘土質土主体。灰白色土、橙色土が若干混入。粘性あり。やや硬い。11層土：赤褐色焼土ブロック。白色粘土ブロック混入。陶器片、窯体片若干混入。12層土：8層土、10層土多く混入。13層土：8層土に焼土ブロック、遺物多く混入。14層土：11層土に8層土多く含む。15層土：にぶい黄褐色粘土質土ブロック。遺物多く含む。16層土：12層土に8層土、焼土多く含む。17層土：12層土に粘土ブロック、焼土ブロック、遺物多く含む。18層土：黒褐色土。軟。少量の炭化粒含むが混入物無。自然層。19層土：暗褐色シルト質土。自然層。20層土：8層土に黒の廃土（焼土ブロック、炭化粒、遺物小片）混入。軟。21層土：暗褐色土。8層土に似るがスコリア様土粒減少。小礫、砂粒等多。軟。22層土：スコリア様土粒。径2mm未満の7.5YR6/8橙色土粒。酸化浮土の可能性あり火山灰土とは断定しない。以下、18層土から23層土断面観察による埋土状況は4頁に掲載。

6 その他の施設

工跡等を想定しながら堆積している瓦等の遺物を除去したが、調査区範囲内には施設は検出されなかった。また、灰原があったと思われる南側と西側は現在水田となっているが、旧水田の下に約30cm程度の瓦の堆積層を確認しており、灰原は現況より低くさらに南側に広がっているものと思われる。



第1図 調査区全体図



B-B' 断面層土

1層土～17層土：2頁本文齋跡の埋土状況と同じ。ただし、1'層土はやや軟。6層土に若干の遺物、硬い焼土小ブロックが混入。

18層土：灰白色粘土質土。やや軟。竈壁片と思われる硬い焼土状ブロック混入。

19層土：8層土の硬い小ブロックからなり、炭化粒、焼土ブロック多く含む。

20層土：18層土と同じ。

21層土：焼土層。やや軟。粘性強い。18層土ブロック入る。

22層土：灰原。遺物、炭化材少量混入。やや軟。

22'層土：22層に焼土混入。

23層土：灰原と思われ、遺物、炭化材多量に混入。焼土ブロック多。

第2図 竈跡平面図、断面図

Ⅲ 出土遺物に関する資料

1 遺物の出土状況

基礎地業の造成状況でもふれたが、遺物は窯跡とみられる箇所をはじめ調査区域全体に瓦などが大量に堆積していた。窯を構築する際の造成状況や窯本体の有無を確認するためには、この厚く堆積している遺物を除去する必要があるため、調査区域内に任意グリッドを設定し、瓦、陶器、窯道具などの遺物を採集した。

堆積していた遺物の大まかな分布状態は、矩形台地の西側に瓦と焼き道具類が多く、陶器類の破片は比較的少なかった。逆に、焚口に近い南西側の堆積から採取した遺物には、素焼きの陶器類が多く含まれていた。

2 出土遺物

出土遺物でもっとも多いのは瓦類で平瓦、丸瓦、軒平瓦、軒丸瓦、その他飾り瓦などである。

陶器類は、火入れ、香炉、壺、皿、播鉢など多種にわたる。また、窯道具も多く、匣鉢や焼台、文字記銘入りの匣鉢のふた、重ね焼き用の詰め物などである。以下、掲載した遺物の特徴的なものについて概要を記す。

(1) 瓦

双鶴文軒丸瓦 南部家の家紋である双鶴文をあしらった軒丸瓦の破片が数点出土している。今回の川原毛瓦窯跡からは1種類（No1～No5）のみで鶴の翼の枚数を明確に数えられるものは少ないが、盛岡城出土双鶴文赤瓦のうち人尾羽双鶴文に類似している。

軒平瓦 掲載した軒平瓦は4点（No6～No9）。2種類と思われ、文様は盛岡城出土藏手唐草垂莖文、飛雲唐草垂莖文が主体である。

紀年銘入り丸瓦 背中央に「延宝四年辰ノ」と線刻されている（No13）。瓦先を下にして、細いヘラ先のようなもので一文字当たり2.5cmから3cm四方で線刻している。下部は欠落して不明。

(2) 陶器

播鉢 瓦以外の製品で最も出土量が多い（No20）。

陶器 播鉢とともに香炉、火入れ、碗等の完成品及び同様の素焼き段階のものも多い。そのほかに、瓶盥（No18、No19）、片口（No42）など特殊なものも含まれている。

(3) 窯道具

匣鉢、焼き台、ささえ物、つめ物などが大量に出土している。匣鉢の蓋と思われる表面に数字が線刻されたものも数点あり、最も鮮明なものは「三十四之内」（No7）と判読できる。

以下、一覧表のとおりであるが大量の出土遺物の中から、実測図とともに資料として掲載できるものを表にした。また、写真はさらにその中から特徴的なものを選別して掲載している。なお、実測図版と写真図版にはこの一覧表に準じて番号を付した。

3 出土遺物の一覧表

(1) 瓦

No	種 別	径×縦×横×厚さ (cm)	面調整・文様等	胎土	釉薬	色 調	図版・写真 No
1	軒丸瓦	16.5 - - 1.6	人尾羽双鶴文	密	鉄釉	暗赤褐色	1-1
2	軒丸瓦	- - - 2.0	人尾羽双鶴文	密	鉄釉	赤褐色	1-2
3	軒丸瓦	16.0 - - -	人尾羽双鶴文	雲母	鉄釉	灰褐色	1-3
4	軒丸瓦	- - - -	人尾羽双鶴文	密	鉄釉	赤褐色	1-4
5	軒丸瓦	- - - 0.8		密	鉄釉	赤褐色	1-5
6	軒平瓦	- 5.5 25.0 2.0	蕨手唐草垂葛文	密	鉄釉	赤褐色	1-6
7	軒平瓦	- 5.2 - -	飛雲唐草垂葛文	荒	鉄釉	灰褐色	1-7
8	軒平瓦	- 7.0 - 2.0	飛雲唐草垂葛文	密	鉄釉	赤褐色	1-8
9	軒平瓦	- 6.6 - 2.3	飛雲唐草垂葛文	密	鉄釉	暗赤褐色	1-9
10	平 瓦	- 26.1 21.0 2.2		雲母	鉄釉	赤褐色	1-10
11	平 瓦	- 26.1 23.6 2.3		雲母	鉄釉	赤褐色	1-11
12	平 瓦	- 22.5 22.5 2.0		雲母	鉄釉	赤褐色	1-12
13	丸 瓦	11.8 - 14.8 1.9	「延宝四年辰ノ」	密	鉄釉	赤褐色	1-13
14	丸 瓦	10.0 - 12.3 2.0		密	鉄釉	赤褐色	1-14
15	丸 瓦	13.0 27.0 13.0 2.0	釘穴	密	鉄釉	赤褐色	1-15
16	棟 瓦	- - - 1.8	輪違 (半円筒系)	雲母	鉄釉	黒褐色	1-16
17	棟 瓦	- - - 1.8	輪違 (半円筒系)	雲母	鉄釉	赤褐色	1-17
18	平 瓦	- - - 1.7		密	鉄釉	赤褐色	1-18
19	平 瓦	- - 11.4 21.0		密	鉄釉	赤褐色	1-19
20	棟 瓦	- - - 2.6	鬘斗瓦	密	鉄釉	赤褐色	1-20
21	平 瓦	- - - 1.8	隅切平瓦	密	鉄釉	赤褐色	1-21
22	鬼 瓦	- - - -		密	鉄釉	赤褐色	1-22

(2) 陶 器

No	器 種	口径×底径×高さ (cm)	釉薬・色・絵・特徴等	図版No	写真No
1	碗	9.7 - -	絵付	2-1	2-1
2	小 壺	5.2 - -	鉄釉、黒褐色	2-2	
3	小 壺	6.4 - -	灰釉、暗灰黄色	2-3	
4	火 入	9.0 7.0 6.0	灰釉、灰オリーブ色	2-4	2-2
5	小 瓶	- 6.4 -	灰釉、黄褐色	2-5	
6	小 瓶	- 7.0 -	灰釉、黄褐色	2-6	2-3
7	灰落し	- 5.8 -	鉄釉、黒褐色	2-7	
8	大 瓶	- - -	鉄釉、オリーブ黒色	2-8	
9	火 入	8.4 - -	鉄釉、黄褐色	2-9	2-4
10	小 壺	7.8 - -	灰釉、黄褐色	2-10	2-5
11	火 入	- 7.0 -	暗褐色、窯体片付着	2-11	
12	灰落し	- 7.6 -	灰釉、オリーブ黒色	2-12	
13	火 入	10.0 8.5 6.3	灰釉、オリーブ灰色	2-13	2-8
14	小 壺	8.5 - -	鉄釉、黒褐色	2-14	2-6
15	香 炉	12.3 7.8 8.0	鉄釉、暗褐色	2-15	

No	器 種	口径×底径×高さ (cm)			釉薬・色・絵・特徴等	図版 No	写真 No
16	香 炉	13.5	7.6	6.8	鉄釉、暗オリーブ色	2-16	27
17	碗	14.6	-	-	灰釉、灰オリーブ色	2-17	
18	瓶 壺	9.2	9.0	4.2	鉄釉、灰釉、黒褐色	2-18	29
19	瓶 壺	6.0	-	3.9	鉄釉、暗褐色	2-19	
20	描 鉢	29.0	-	-	鉄釉、褐色	2-20	2-10
21	小 皿	15.6	-	1.9	鉄釉、黒褐色	2-21	
22	大 皿	23.0	10.4	6.1	灰釉、灰オリーブ色	2-22	
23	碗	16.4	-	-	鉄釉、オリーブ褐色	2-23	
24	大 皿	27.8	-	-	灰釉、黄褐色	2-24	
25	中 壺	15.6	-	-	鉄釉、オリーブ黒色	2-25	
26	中 壺	12.4	-	-	鉄釉、黒褐色	2-26	
27	香 炉	14.8	7.5	8.0	鉄釉、暗オリーブ色	2-27	
28	甕	-	9.8	-	灰釉、暗オリーブ色	2-28	
29	花 瓶	-	-	-	鉄釉、オリーブ褐色	2-29	
30	汁 次	7.4	-	-	鉄釉、黄褐色	2-30	
31	中 壺	-	9.8	-	灰釉、暗オリーブ色	2-31	
32	大 皿	-	18.0	-	灰釉、灰オリーブ色	2-32	
33	徳 利	-	-	-	素焼	2-33	
34	徳 利	4.2	-	-	々	2-34	2-13
35	香 炉	12.0	6.6	7.0	々	2-35	2-11
36	小 壺	8.5	6.8	7.3	々	2-36	2-12
37	灰落し	20.8	-	-	々	2-37	2-14
38	壺	-	-	-	々	2-38	
39	中 皿	18.8	10.9	4.6	々	2-39	2-15
40	深 皿	21.6	7.8	14.4	々	2-40	
41	中 鉢	19.6	-	-	々	2-41	
42	片 口	24.0	-	-	々	2-42	2-16
43	火 鉢	36.2	-	-	々	2-43	2-17
44	汁 次	-	-	-	々	2-44	
45	大 鉢	31.8	24.6	16.3	々 籬、高台付	2-45	2-18

(3) 窯道具

No	道具名	口径×底径×高さ×厚さ (cm)				用途・特徴等	図版 No	写真 No
1	トチン	10.6	12.2	6.9	-	焼台	3-1	3-1
2	サ ヤ	18.6	18.6	9.7	-	匣鉢、内面補修指跡	3-2	3-2
3	ツ ク	-	-	-	-	支柱	3-3	3-6
4	トチン	12.8	13.0	5.0	-	焼台	3-4	3-3
5	トチン	12.3	15.0	7.6	-	焼台	3-5	3-4
6	サ ヤ	23.0	23.6	6.9	-	匣鉢	3-6	
7	エブタ	-	-	-	1.8	匣鉢の蓋、「三十四之内」	3-7	3-5
8	エブタ	-	-	-	1.7	匣鉢の蓋	3-8	3-7

IV 資料のまとめ

1 川原毛瓦窯跡の歴史的背景

盛岡城関連文献である「御城廻御修補」寛保2(1742)年9月13日条や「内史略」の嘉永元年(1848)領内産物書上げには二日町新田、陣ヶ岡長岩寺付近において瓦楽焼土を掘り出していたことが上げられており、当地域は良質の瓦粘土が産出されていたことが文献から見てとれる。

2 瓦等の生産供給と窯業年代

今回の調査で、有階有段の登り窯を検出し瓦等が出土したことから、当地で瓦が生産されていたことが明らかとなった。盛岡藩「雑書」延宝3(1675)年4月20日条には、盛岡城二階櫓に要した瓦について、仙台領一ノ関の瀬戸瓦焼職人に請け負わせていることがわかる。この職人が川原毛瓦窯跡で焼いたことを断定する資料はないが、調査した川原毛瓦窯跡は、須恵質瓦ではなく、瀬戸瓦、いわゆる陶製の赤瓦を生産していたことが確認できた。また、「御城廻御修補」によると、延宝4(1676)年6月10日、29日盛岡城では本丸三階櫓の新規造営が行われ、本丸三階部分で「柱立て」、「棟上げ」があったとされている。今回出土した延宝4年銘入り丸瓦はその城の整備年の条件を満たす資料である。また、双鶴文様の軒丸瓦も、瓦は全て同じ組成の粘土で製作されたとの胎土分析結果が出ていることから、同時期と思われる。以上から、川原毛瓦窯跡は少なくとも17世紀後半から陶製瓦を生産して盛岡城に供給していたことが文献と一致する。

出土陶器の特徴としては、形態が瀬戸系に類似しており、擂鉢を除き香炉、瓶蓋、片口など当時庶民が使う日常雑器とは思えない器種も多く出土している。また、窯道具の中に「三十四之内」と文字の入った匣鉢の蓋も数点出土しており、まとまった数の消費地があったことを窺わせる。陶器の供給先については、今後の調査、研究を待たなければならぬが、瓦と同様に盛岡城下に供給された可能性を捨てきれない。

「御城廻御修補」寛保2(1742)年9月13日条では、盛岡城本丸三階櫓屋根の葺替えに伴い、瓦土採取地として陣ヶ岡長岩寺下通を吟味したがほとんど取り尽くされていたので周辺から調達することとしたとの記事が見られる。いずれにせよ、この窯の最後は素焼きの製品をそのまま残し、何らかの理由により突然廃棄されたと思われる、窯の最終年代は今後の課題とする。

3 おわりに

川原毛瓦窯跡は、調査後保存のため埋め戻しを行い、窯の位置を表すため窯体状に盛土し、野芝を植栽している。周囲には、隣接する水田とりんご畑の影響も考慮し低い生垣を巡らした。また、入口の町道には標柱を立て窯跡前面には説明板を設置している。なお、平成2年度、土地所有者のご理解を得、紫波町が買上げ現在に至っている。

今回報告した資料は、出土した資料のごく一部であり、調査してから20年以上経過していることから、出土遺物についての位置や層位でセット関係を見出すことが難しかった。しかしながら、盛岡城で使用された赤瓦の窯跡の調査としては、現時点で唯一であり、併せて近世初期に地元で生産された陶器類の調査資料が少ないことから、本書が今後の調査、研究の一助になることを願って報告するものである。

参考文献 「紫波町史第一巻」1972 紫波町

「盛岡城跡Ⅰ」1991 盛岡市教育委員会

「岩手のやきもの-江戸・明治期の造形美-」企画展図録 1998 盛岡市中央公民館

「江戸遺跡検出の焼き物分類」1991 新宿区四谷三丁目遺跡調査団

「瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅱ」1989 瀬戸市歴史民俗資料館

窯跡関連文献資料

①『雑書』延宝三年（1675）閏四月二十日条

御木丸御二階屋根瀬戸瓦二被仰付事

- 一 金七拾両老歩瓦色々取合式万三千百六拾枚之代（中略）右御定之瓦当七月中二焼上候定、拾年之内瓦老枚成共破損候ハ、瓦焼手前入方二而繕候定、葺上しつくい損候ハ、御前より被仰付等

瀬戸瓦焼仙台領一ノ間 庄兵衛

請人三日町 助作

②宝永六年（1709）「御城廻御修補」

- 一、九月十三日御三階御屋根来年御膳御用意赤瓦焼候小屋並瓦小屋共々先達而被仰付出来仕候付、先年瓦土取場所日詰御代官所之内陣ヶ岡長岩寺と申寺之下通二而堀取候様仕度由申出候付（以下略）

③「内史略」嘉永元年（1848）

日詰長岡通

- | | | | |
|--------------|--------|--------------|-------------------|
| 一 瓦楽焼土 | 二十日町新田 | 已前陣ヶ岡の産にて掘出す | 今其掘場所尽て右村高の目より掘出す |
| 一 畳表 | 惣村織出 | 一 並鉛 | 白山に有候産地 赤沢村 |
| 一 白土 長岡館にもあり | 長岡村 | 一 白土 | 稲荷近所ニカ所の産 鱒沢村 |
| 一 線香 重蔵と云う者製 | 日詰町 | 一 鼠色石 | 船久保村 |
| 一 合砥石 | 長沼村 | | 湯山と云所の辺りより出る硯に用 |

④「盛岡市史」第五分冊

慶安三年西曆一六五〇に瓦焼奉行大澤吉右工門が任命され、延寶三年閏四月二十には本丸二階屋根瀬戸瓦は一の間の庄兵衛と云うものが命ぜられている。二萬三千百六十一枚が七十両であった。藩内では寶永中に盛岡寺町で瓦をやいたことが伝えられているが、明證がない。寛保二年には三階屋根赤瓦の材料は日詰代官所之内陣ヶ岡長岩寺附近のものが用えられた。寛政には八幡丁に宇兵衛・赤瓦師源吉がやいていることが知られる。

盛岡城などから発掘される雙鶴紋の瓦は築城した當時のものがあり、藩政末まで十數種ある。これらの瓦をやいた場所は仙北町下河原と、紫波古館二日町新田川原毛の二箇所で作かれた。（以下略）

川原毛瓦窯跡出土資料の胎土分析

岩手県立博物館 木村克則 赤沼英男

1 はじめに

紫波町川原毛瓦窯跡から1基の窯跡が検出され、合わせて瓦、陶器及びさやなどが出土している。出土資料のうち、瓦が約9割ともっとも多くを占める。出土資料の組成を明らかにし、同窯跡で何が製作されどこに供給されたかを解明することを目的として紫波町教育委員会から自然科学的調査を依頼された。調査継続中ではあるが、とりあえず出土資料の材質に関する第一次の調査が終了したのでその結果を報告する。

2 分析資料

分析した資料は、瓦21点、さや3点、鉢1点、素焼きの壺2点の計27点である。なお、これらはすべて窯の稼働年代と同時代のもので推定される。

3 分析方法

土製品の材質上の特性を調べるには、Rb、k、Caの4元素のとりわけRb/Sr、k/Caを算出する方法が有効とされている。ここではその4元素を測定対象とし、蛍光X線分析装置を用いて分析を行った。その手順について以下に示す。

- ① 資料切断機を用いて、分析用サンプルを切り取った(3cm～4cm)。
- ② 表面に付着している顔料、土砂等をグラインダーを用いて除去し新鮮面を表出させ出来る限り平坦な面とした。
- ③ X線の照射面積を一定にするため、直径2cmの孔が開いた純銅製のマスクを試料ホルダーにセットした。
- ④ 蛍光X線分析装置により、Rb、Sr、k、及びCaの4元素それぞれのピーク強度を測定し、Rb/Sr、k/Caを算出した。なお、ピーク強度の測定についてはバックグラウンドを除去した。

測定条件は、以下のとおりである。

装置 蛍光X線分析装置 リガク Systemu3511
対陰極: Cr 印加電圧: 電流 50KV - 40mA X線照射口にキャプトン装置
分光結晶 LIF (対象元素 Rb, Sr) GE (K, Ca)

4 瓦資料の偏析と測定面について

資料に偏析がある場合、直径2cmの分析だけではその資料の平均的な組成を得られるとは限らない。そこで、顔料を除去して得られたA面の新鮮面と切断して得られたB面の新鮮面の2つの面(図1参照)を分析し、偏析の有無について検討した。A面及びB面から得られたRb/Sr、k/Caをプロットしたものを図2、図3に示す。偏析がない場合、プロットされた点は原点を通る傾き1の直線上にのるはずである。図2、図3とも各線はほぼ直線上に分布しており、A面とB面とに資料の偏析がないことが確認された。したがって、測定には直径2cm以上の閉店面が得られるA面を用いた。なお、この資料偏析に関する分析には資料に充分厚みがありB面で充分な平坦面が得られた6点のみ実施した。

5 分析結果と考察

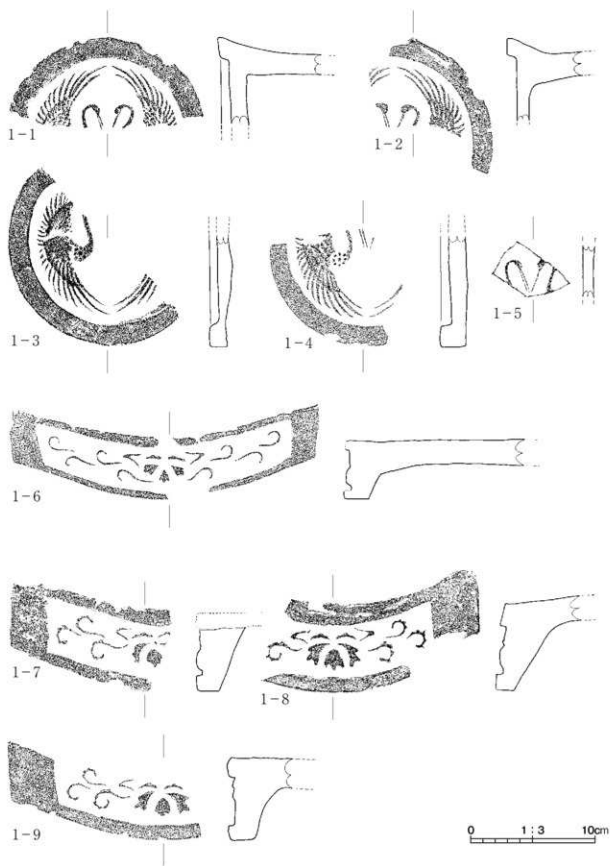
図4にRb/SrをX軸に、k/CaをY軸にプロットしたものを示す。まず2つの壺(A、B)についてみると、それらはかなり離れており粘土組成が異なるものと考えられる。この2点の壺は肉眼観察でも胎土の色調に差が見られ、また異なった形状をしていることも分析結果を裏付けている。

分析した3点のさやはグループ1を形成している。また鉢、壺Bもこのグループ中に分布しておりこれら5点は同じ粘土から製作されたものとみなすことができる。

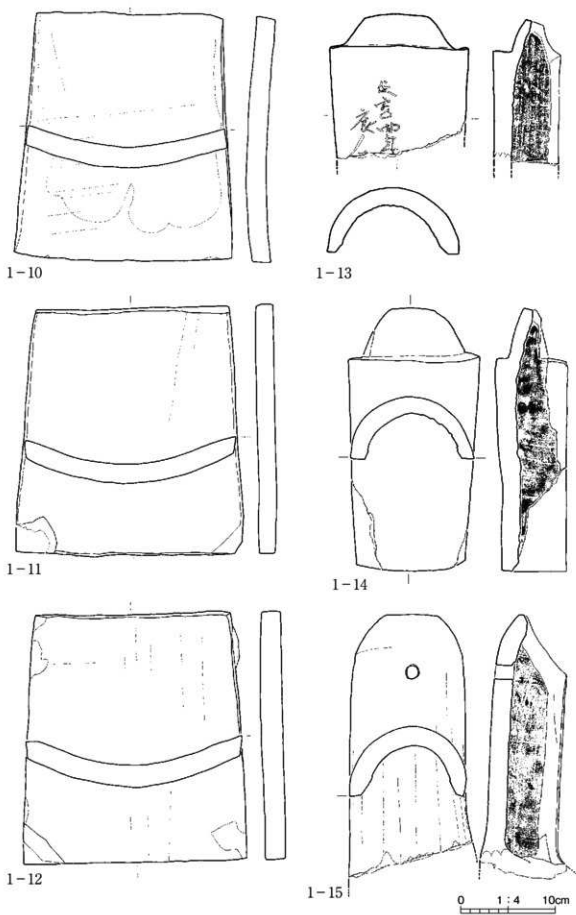
瓦はグループ2を形成しており、瓦は全て同じ組成の粘土で製作されたものとみなすことができる。次に、グループ1と2について検討する。グループ1、グループ2はどちらも直線上に分布しているもののその傾きは異なるように見える。この2つは別の粘土組成である可能性が高い。この場合同窯にどちらかのグループが半製品で持ち込まれたと考えられるが、これについては現地の粘土組成の分析を行っていない現在ではこれ以上言及できない。今後、現地の粘土の分析を行うことによりこの問題は解決されると思われる。

(当時県立博物館から分析の報告を受けていたものを、了解を得て本文のみをそのまま掲載した。)

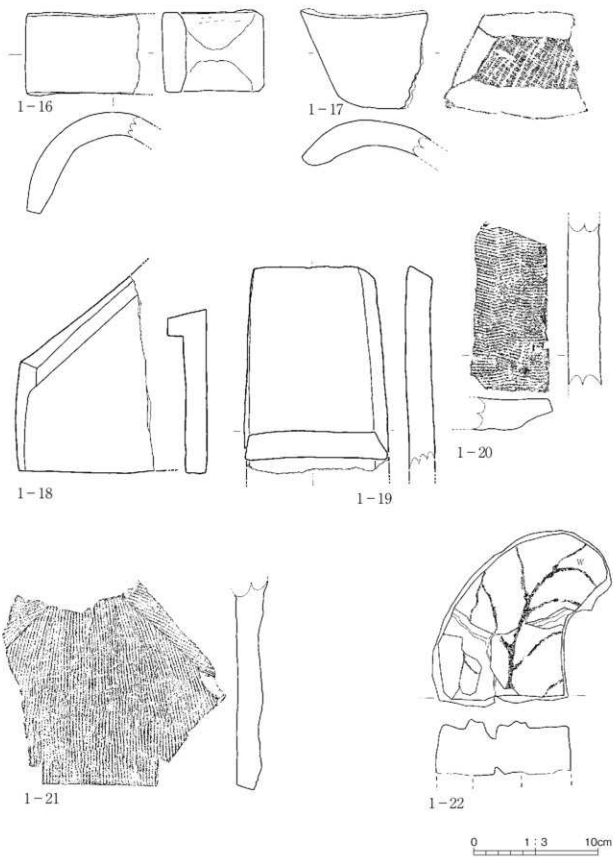
出土遺物実測図版



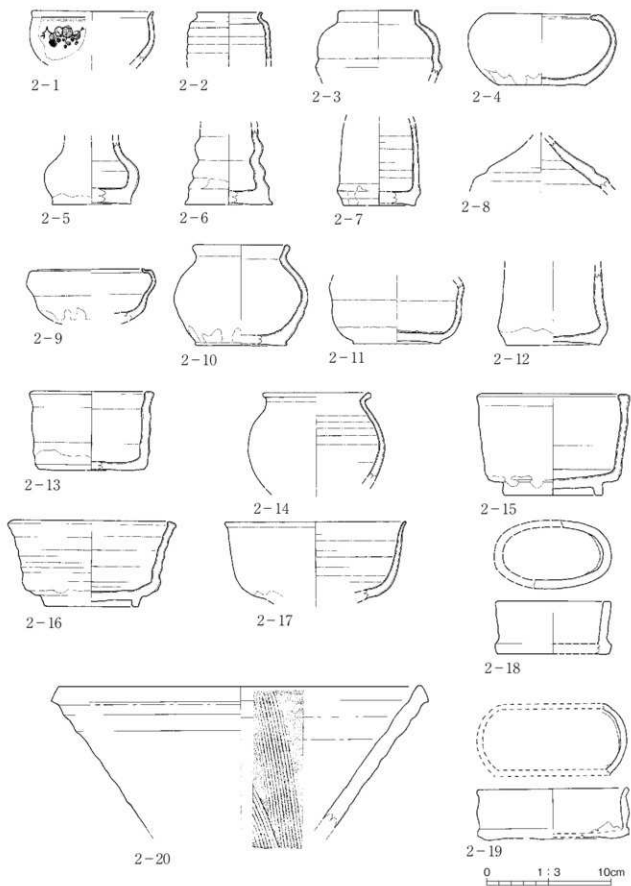
第3图 瓦 实测图



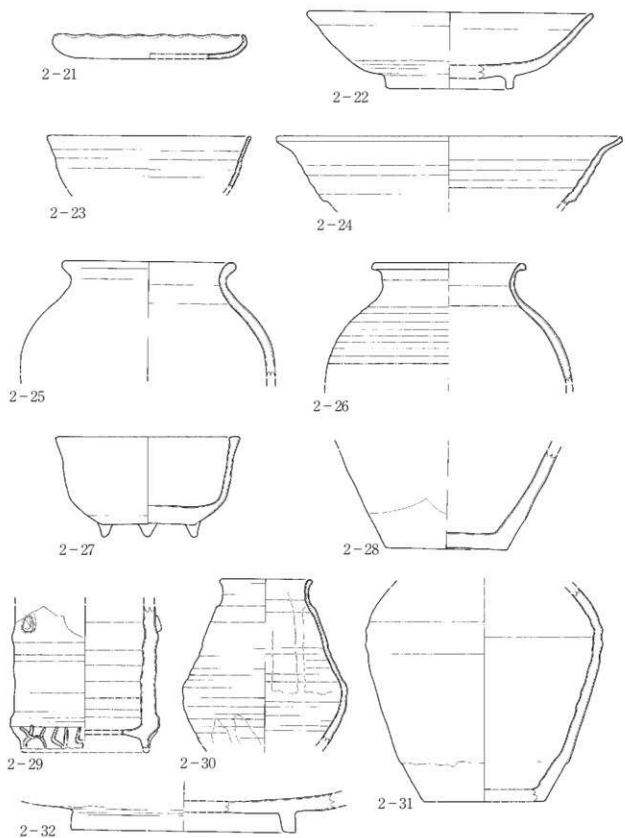
第4図 瓦 実測図



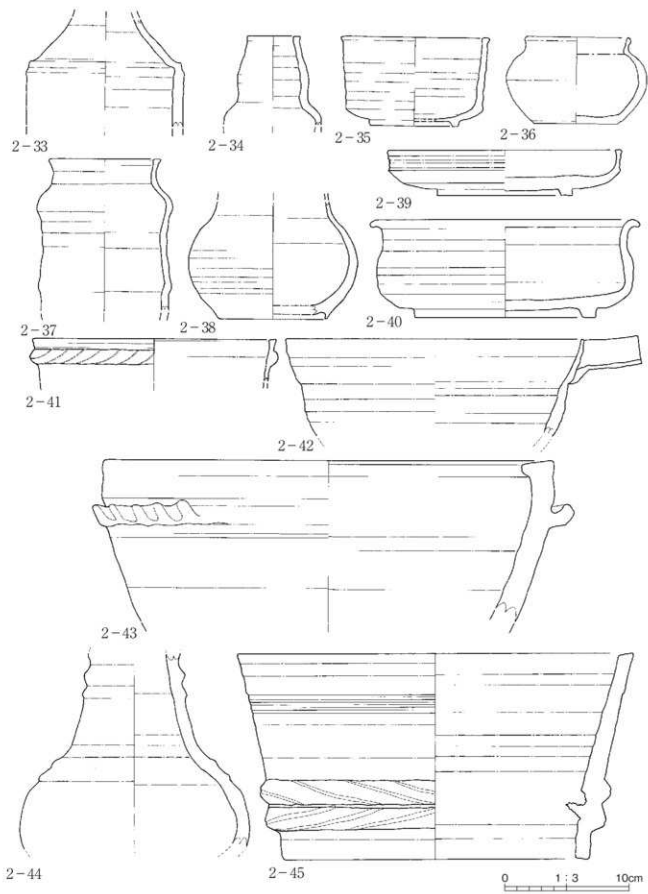
第5圖 瓦 実測図



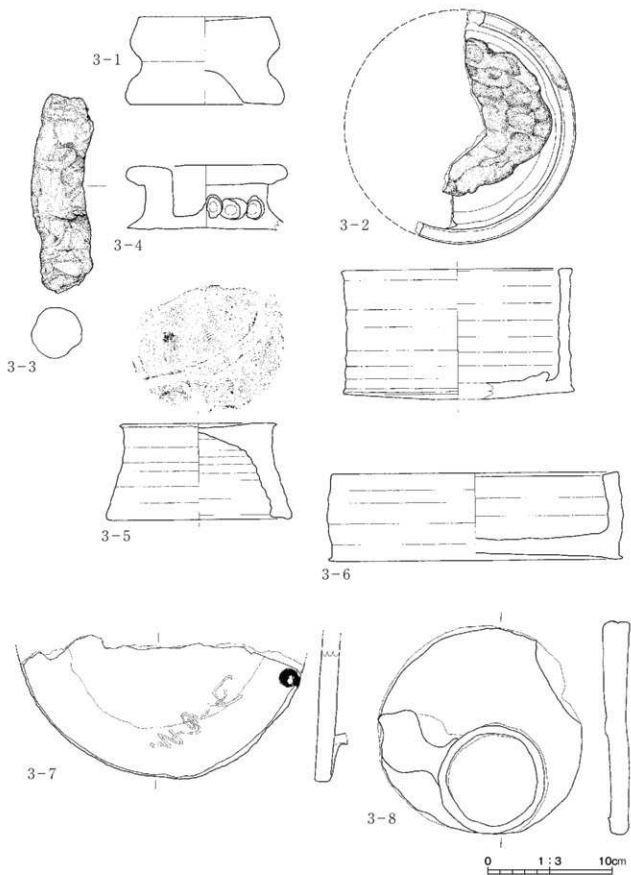
第6図 陶器 実測図



第7図 陶器 実測図



第8図 陶器 実測図 (素焼)

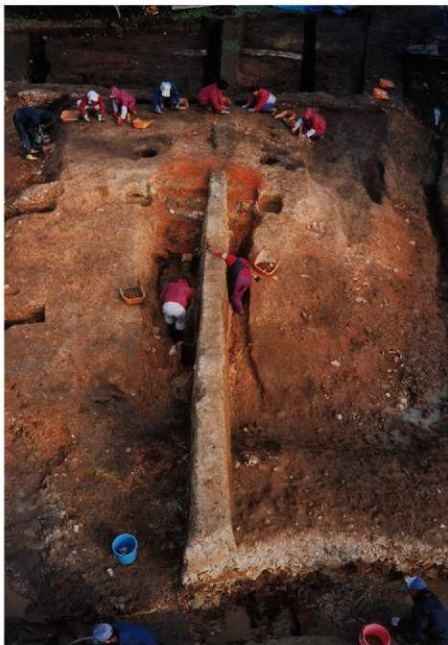


第9図 窯道具類 実測図

写 真 图 版

IV 写真図版

窯跡調査風景
(南から全景)



平瓦出土状況
(北西附近)





1-1



1-2



1-3



1-4



1-5



1-6



1-7



1-9



1-8

第1図版 瓦（縮尺任意）

1-10



1-11



1-12



第2図版 瓦（縮尺任意）



延宝四年辰ノ



1-13



1-14



1-15



第3図版 瓦 (縮尺任意)



第4図版 瓦 (縮尺任意)



2-2



2-3



2-4



2-5



2-1



2-6



2-7



2-8



2-9



2-10

第5図版 陶器（縮尺任意）



2-11



2-12



2-13



2-14



2-15



2-16



2-18



2-17

第6図版 陶器(素焼)(縮尺任意)



3-1



3-2



3-3



3-4



3-5



3-6



3-7

第7図版 窯道具（縮尺任意）

資料集抄録

ふりがな	かわらけかわらかまあとしゆつどしりょうしゅう							
書名	川原毛瓦窯跡出土資料集							
編著者名	花籠博文							
編集機関	紫波町教育委員会							
所在地	〒028-3305 岩手県紫波郡紫波町日詰字下丸森 24-2 電話 019-672-3362							
発行年月日	2013年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かわらけかわらかまあと 川原毛瓦窯跡	いわてけんしれぐん 岩手県紫波郡 しわらぎちょうふつかまも 紫波町二日町 あがからけ 字川原毛 75					1989.10.16 - 11.15	286	圃場整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
かわらけかわらかまあと 川原毛瓦窯跡	窯跡	近世	登窯一基		瓦、陶器、窯道具			
要約	<p>近世初期の文献により、この地域から良質の瓦粘土が採集されていたことは記録されていた。平成元年の調査により、登り窯1基と瓦、陶器等が出土したことから粘土のみならず瓦が生産されていたことを確認した。これらの出土遺物の中に、南部家の家紋である双鶴文を付した軒丸瓦や延宝4年銘入りの丸瓦が含まれており、盛岡城を整備した文献と一致し、瓦が盛岡城へ供給された御用窯であることを確認した。また、瓦と併せて同時期と思われる陶器（素焼段階のもの含む）も多く出土し瓦のほかには日常雑器を生産していたことを確認した。本書は、これらの調査概要と出土遺物の資料集である。</p>							

岩手県指定史跡
川原毛瓦窯跡出土資料集

平成 25 年 3 月

編集・発行 紫波町教育委員会
〒 028-3305 岩手県紫波郡紫波町日詰字下丸森 24-2
電話 019-672-3362 fax 019-672-1553

印刷 株式会社 社陵印刷
〒 020-0122 盛岡市みたけ二丁目 22-50
電話 019-641-8000

